



■主な内容

2012年度総会基調講演「これからの建築を考える」
 UIFA JAPONの2012年度の活動を展望して
 「郡山第一回どこでもカフェ」開催
 講演会「ぶらり法末花の旅」報告
 特集：くーるじゃぱん ・明日へつなぐ記憶—伝技塾について—
 ・ハンティントン庭園ジャパニーズハウス
 ・日本庭園文化の読解—自然の骨格と仕組みに学ぶ

魅力的なりノバージョン no.13「ターニングポイント」は小さな画廊で
 連載：被災地通信 (4) 進まない復興事業
 「バイオニア展」と「建築と歩む展」
 会員紹介の本「つなみのえほん」
 さあ行こう！「モンゴルの集結！」ウォーミングアップ企画「思い出のシアトルコンサート」



左から 再現された庭川上貞敬邸（名古屋）
 「旅」から、「舟に田園」上「閑寂り舟に風」下
 日本多摩（岡崎市）の真鍮タイルの浴室（写真：奥村）

2012 Annual Meeting 第20回 UIFA JAPON 定例総会報告

2012年度の総会は6月16日（土）13：30から、財団法人経済調査会の大会議室（銀座）で開催。出席者39名、委任状を加え総会は成立。2011年度の活動と会計収支が報告され、今年度の活動計画と予算が承認された。二人目の副会長に稲垣弘子氏が就任し、総務1名、事業1名、広報・渉外2名、会計1名の役員が交代し、新しい体制でスタートした。（薄井温子）

The 2012 UIFA Japon General Meeting was held on 16th June at the Economic Research Association in Ginza. A quorum was achieved, and agenda items concerning annual activities, the budget and new official members were all approved. (USUI Haruko, trans.=NA)

2012年度第20回総会基調講演：報告 伊東豊雄「これからの建築を考える」

MIKAMI Noriko 三上紀子



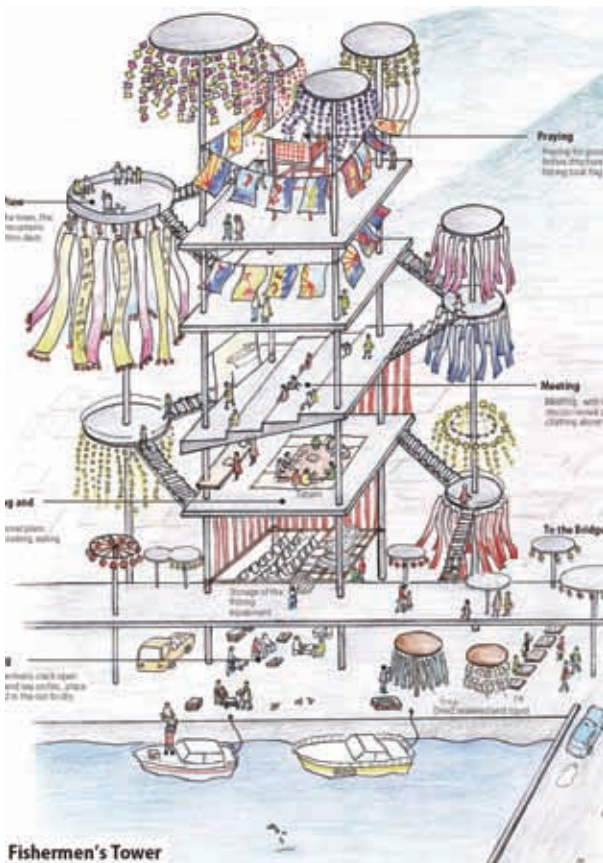
講師：伊東豊雄氏（撮影：渡邊）

東日本大震災から一年以上が過ぎ、各被災地では仮設住宅への入居やまちづくりへの復興が始まりました。仙台メディアテークの被災をきっかけに復興計画に関わりはじめた伊東氏は、被災地の仮設住宅地域に集会所をつくる「みんなの家」プロジェクトを通じて、「建築は誰のためにつくるのか」「建築は何のためにつくるのか」といった最も初原的な問いを自ら向けます。前衛的な造形で知られる伊東氏には珍しく「みんなの家」はシンプルな切妻屋根のかたちです。当初は“ミニメディアテーク”と呼んでいたそうですが、プロセス中で「みんな」という言葉がもつ大きな意味に気づき、「みんなの家」と呼ぶこととなったそうです。住民と一緒に模型を見ながら検討する過程を通して、どんなに小さくても家が戻ってきた実感の大切さ、あかりのあたたかさを再確認したとのこと。「みんなの家」にはここを媒介にみんながよるこびをつくる場所になって欲しいとの願いが込められています。一方、陸前高田や釜石の復興計画では、若手建築家や地元住民との協働、学生達とのワークショップを通し、技術を主体にした＜安心・安全＞を掲げる自治体の復興計画に対してどうやったら日常的に楽しめるまちを復興できるのかという課題に取り組みます。内と外との空間を段階的にグラデーションに構成する、＜安心・安全＞だけではなくその背後にある考え方を考慮してもともとあった形に添って復興を考えていく等、これまでの伊東氏の造形とは一味違った新たなまちや建築の姿が提案されていました。またヴェネチア・ビエンナーレ展での展示パビリオン「バーレーンの漁夫小屋」の素朴さに感動し貰い受けて釜石に移設したこと、東北のお祭り「けんか七夕」のそこから何かが始まるのではないかと静かな躍動感のお話なども伺うことができました。



仙台市宮城野区の「みんなの家」竣工式 妻屋根のかたちです。当初は“ミニメディアテーク”と呼んでいたそうですが、プロセス中で「みんな」という言葉がもつ大きな意味に気づき、「みんなの家」と呼ぶこととなったそうです。住民と一緒に模型を見ながら検討する過程を通して、どんなに小さくても家が戻ってきた実感の大切さ、あかりのあたたかさを再確認したとのこと。「みんなの家」にはここを媒介にみんながよるこびをつくる場所になって欲しいとの願いが込められています。一方、陸前高田や釜石の復興計画では、若手建築家や地元住民との協働、学生達とのワークショップを通し、技術を主体にした＜安心・安全＞を掲げる自治体の復興計画に対してどうやったら日常的に楽しめるまちを復興できるのかという課題に取り組みます。内と外との空間を段階的にグラデーションに構成する、＜安心・安全＞だけではなくその背後にある考え方を考慮してもともとあった形に添って復興を考えていく等、これまでの伊東氏の造形とは一味違った新たなまちや建築の姿が提案されていました。またヴェネチア・ビエンナーレ展での展示パビリオン「バーレーンの漁夫小屋」の素朴さに感動し貰い受けて釜石に移設したこと、東北のお祭り「けんか七夕」のそこから何かが始まるのではないかと静かな躍動感のお話なども伺うことができました。

今年秋のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展ではコミッショナーを務める伊東氏。最近では子供向けの建築塾NPOも始められたとのこと。質疑応答では学生の率直な質問が飛び交いましたが、真摯に答える氏の様子に改めて氏の建築に対する深さを感じました。建築の真の意味とは？新しいということの真の意味とは？「これからの建築」について、70名の参加者一人一人が各々想いを巡らした1時間半でした。



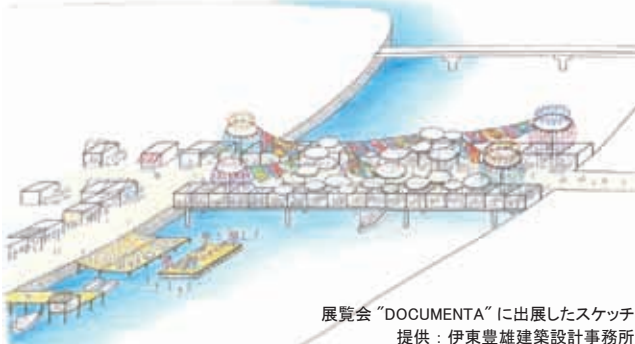
展覧会「DOCUMENTA」に出展したスケッチ

提供：伊東豊雄建築設計事務所

2012 Annual Meeting Commemorative Lecture; ITO Toyo,
 "Next Generation Manifestations of Architects"

YOSHIDA Ako 吉田あこ

Ito Toyo, a world-famous architect and recipient of AIJ Prizes (1986, 2003), the Golden Lion Prize at the Venice Biennale (2002) and the Royal Golden Medal from RIBA (2006), among



展覧会 "DOCUMENTA" に出展したスケッチ
 提供: 伊東豊雄建築設計事務所

other awards, spoke about his creative works at UIFA's 20th Annual Meeting Commemorative Lecture in June. He also spoke about the Fukushima Earthquake (3/11/11), which razed many cities, damaged Ito's Sendai Mediatheque, and created the need for temporary housing and community spaces. In response, Ito and a collaborative team of locals and experts from industry and academia came up with plans. Their first project was a community cottage, called Minna No Ie (House for All). Now, people from within and outside the city gather there every day, and several events have been held. What the earthquake- and tsunami-affected areas need now are "bonds" among residents, so they can support each other on the long road to recovery.

The new public commons approach is packed with possibilities for permanent housing plans, including: Kanamachitakadai Recovery House plan, building a stair house along a cliff, a fishermen's clubhouse, "matsuri" festival projects which remind people of the area, and the Affect Energy Consumption System project in the Gifu Multimedia Complex. Ito's last slide showed a charming graphic image of his Taichung Metropolitan Opera House, which is under construction in Taiwan.

The excellent achievements of Ito's works moved us a great deal and energized us to recover from last year's disaster.

Outlook for UIFA Japon's Activities in 2012
 UIFA JAPON 2012 年度の活動を展望して

UIFA Japon President, MATSUKAWA Junko
 UIFA JAPON 会長 松川淳子

6月の総会でもお話したように、UIFA JAPONのこの数年間の活動は、大きな広がりを見せている。与えられた文字数が少ないのでここでは十分に説明できないが、事業の実施や広報などの基本的活動からパイオニア展のような特別目標、国際交流など、さらには東日本大震災の被災地に対する支援活動など、多くの会員がそれぞれの立場からかわり、活発に動いていることは、会員皆様自身が十分認識されていると思う。



総会 (撮影: 渡邊)

国際交流はUIFAのベースを作っている活動であるが、来年、モンゴル大会が開催される予定が発表され、今年度の活動を通じて、この準備も進めていきたい。東日本大震災の被災地への支援も、引き続き、活動の大きな柱となることも間違いないだろう。被災後、2年目に入った今年は、支援の方法にも新たな段階が求められているかもしれない。

あらゆる活動に共通することでもあるが、とくに被災地とのかかわりは、何をどこまでやるのか、きちんと総括しながら進まない、相手の信頼を失ってしまうことにつながりかねない。UIFAのような緩やかな組織形態を持つ団体にはなかなか難しいことでもあるが、カバーし合って実り多い活動にしていきたいと思っている。

As I mentioned at the General Assembly in June, UIFA Japon has been significantly expanding its activities over the past few years. Space limitations do not permit me to go into sufficient detail, but I know, however, that all our members recognize that most people are proactively engaged

in a wide variety of work: not only routine tasks such as basic operations and PR activities, but also special duties including exhibitions like "Pioneering Women in Architecture from Japan and Beyond," international exchanges and supportive action for the Tohoku Earthquake.

Concerning activities related to international exchanges — fundamental to UIFA — we would like to promote preparations for the Mongol Congress in 2013 as announced. Also, supportive actions for the areas affected by the Tohoku Earthquake are still an important pillar of our mission. Now in the second year since the disaster, current conditions have entered a new phase. At this juncture, it is significant to properly clarify and review how and what we are allowed to do for the affected people. If we fail to do this, we may lose their trust. Certainly it is not easy for us to evaluate situations appropriately because UIFA is a flexibly linked organization. Therefore, we should work together and cover each other so that our dedication will produce fruitful results.

表作製: 森田美紀 (trans.=NA)

現在進行形の UIFA の支援活動	Activity	Ongoing Support Activities by UIFA Japon
内容	名称	Description
「どこでもカフェ」は、東日本大震災の被災地のあちこちに移動するカフェのことで、会員がお抹茶やコーヒー・紅茶、お菓子をお出し、仮設に暮らす人々にゆったりとしたひと時を過ごしていただくことを目的としています。	Café Anywhere どこでもカフェ	A project to open a temporary café anyplace in the stricken Tohoku area, serving tea and sweets in the style of the Japanese tea ceremony, in order to provide a relaxing experience for evacuees in temporary housing.
レンズ付カメラなどを配布し、住人の視点から「岩泉町のいま」を記録するプログラム。全員の写真展にはプロが選んだ3点ずつを展示。写真家による撮影指導、講習会などを行なっています。	We are the photographers! だれでも フォトグラフィア	A project to record "What's going on in Iwaizumi" by using instant cameras provided to the residents by UIFA Japon. Three photos for each person are selected, exhibited and critiqued by real photographers.
「法末」はこの6年間継続している、新潟県長岡市小国町の法末集落での取り組み。お茶会のほか、毎年恒例になっているカレンダー作り、オープンガーデンなどの企画を支援しています。	Hossue support 法末	A project that has continued for 6 years in Hossue, a village that was stricken by a 2004 earthquake. We set up tea ceremony parties, an open garden, hold new year's celebrations and create original calendars, etc., to support residents.

First "Café Anywhere" Held in Koriyama
「郡山第一回どこでもカフェ」開催

INAGAKI Hiroko 稲垣弘子



稲垣弘子：新副会長
(写真提供：在塚)

郡山市にある川内村の仮設住宅から都庁職員ボランティアネットワークを通じて「どこでもカフェ」開催の要望があり、初めて7月21日(土)に開催。参加者は会員11名、都庁職員ボランティア3名、新潟建築士会3名。

午前は富岡町民の若宮前仮設住宅(約500世帯)にある町の社会福祉協議会によるサポート拠点「おだがいさまセンター」で。ここでは週2回のサロンが開かれており、そのサロンの中でお抹茶のみ提供。午後は川内村と富岡町住民の住む南一丁目仮設住宅(あさかの杜ゆぶね:約300世帯)。川内村社会福祉協議会の高齢者サポート拠点で開催。こちらではお抹茶だけではなく、コーヒー、紅茶もお出ししました。

どちらも富岡町と川内村の住民が大半。震災から1年以上が経過し、先の見えない中で仮設に引きこもる方も多くなっているとのこと。特に原発からの避難者は地域により帰宅困難や避難解除など避難当時と状況が変り住民間に格差が生じやすい状態。「同じ仮設住宅にいても、他の町村の人と一緒に集まるのは初めて」と言う方もいました。お茶会という伝統の力を借り気分も一新、住民同士の話に花が咲き笑い声も漏れ、私たちも話の輪に加わり傾聴に努めました。帰り際に「ゆっくり話をしたかった」と声を掛けられ、落ち着いた生活が一日も早く訪れることを祈らずにはいられませんでした。



富岡町若宮前仮設住宅団地「おだがいさまセンター」(撮影：平野正秀)

As part of our activities to support those stricken by the Tohoku Earthquake, UIFA Japon opened a Dokodemo Café (Anywhere Café) three times in Iwaizumi, Iwate. Last July, the first Dokodemo Café was held in Koriyama, Fukushima. Along with three volunteers from the Tokyo Municipal Office and three from the Niigata Architects Association, 11 members of UIFA opened the one-day green tea café at a temporary housing site in Tomiokacho and Kawauchimura. More than a year since the earthquake, people in the area tend to stick close together due to the uncertainties of their circumstances. Those evacuated from the nuclear plant area, in particular, have difficulties in this unstable, complex situation. One of the residents told me that she never had a chance to get together with people from neighboring towns. Through the power of the traditional tea ceremony, the participants could have a pleasant time. I really wish they could all return to normal life as soon as possible. (trans.=TA)

Lecture on Tourism in Rural Villages
講演会「ぶらり法末・花の旅」報告

IIDA Towa 飯田 とわ



陣内秀信先生

法末オープンガーデン2012の一環で開催された陣内秀信教授(法政大学)の講演会。研究フィールドのイタリアにある小さなまちが、法末に重ねながら紹介された。講演前に参加者と会場周辺を歩き、集落の景色を堪能した陣内先生。起伏のある地形をうまくいかして連続した風景がつくられており、世界遺産にもなったオルチャ渓谷のようだ、と語る。

イタリアでは80年代頃から、田園地帯の何でもないような風景等が価値あるものとして認識されるようになった一何でもない風景

と言いつつ、広大な田園風景や、白壁の迷宮空間、海岸沿いの城塞都市等の画像はすでに十分魅力的だけれど一このような特に観光スポットもなく、あまり知られていない小さなまちでも、その文化・歴史が観光資源として再評価されているという。保存するだけでなく、その質を高めながら利用していくという考えのもと、風景法やアグリツーリズム(農場観光)法等の法整備も進んでいる。過疎化で眠っていた農園や産業遺産をホテル、美術館等へ転用、さらに場所によっては、アグリツーリズム、ペスカツリズム(漁業観光)等、その土地ならではの文化を体験してもらおう仕掛けも充実する。訪れる人が喜び、外からの関心が高まると、保存・再生への意識が高まり地域が元気になる。地元の人、観光客とともに地域の魅力を再発見しているようだ。



どの家の方も気さくに説明してくれる。

講演後はオープンガーデンをみながら家の方と話をしたり、足湯につかりながら落ちていく夕日を眺めたり、夜は地元の食材でつくられたおいしい夕ご飯と会話を楽しんだ。講演中、今後の観光の大事な要素として、ホスピタリティという言葉が何度も出てきたが、迎える人も訪れる人も自分のペースで楽しめる居心地のよさを提供している、ということみただ。

Hosei University Prof. Hidenobu Jinnai held a lecture as part of Open Garden 2012, Hossue on 29th July. He introduced small towns in Italy, his main field of research, which are very similar to Hossue. Before the lecture, he walked around the village. The undulation of the landscape reminded him of Val d'Orcia, Italy, a World Heritage Site.

From the 1980s, ordinary small towns in the countryside have attracted tourists to Italy (although I thought the slides he showed were very attractive). The culture and history of these small towns have been attracting attention even though they don't have any special sightseeing spots. Such laws as the Law for Landscapes and Law for Agriturismo have helped not just to conserve but also to use these areas, while enhancing their qualities. Old farms or industrial heritage sites that haven't been used for a long time due to depopulation, have now been converted into nice hotels or museums. There are also various activities like agriturismo and pescaturismo, which are distinctive to each town, and visitors can experience local culture.

If it makes visitors happy, and other people become more interested, small towns could gain momentum to preserve and reuse their own history and culture. The identity of rural people is being recognized anew.

After the lecture, I walked around the village, enjoyed the gardens, footbath, and beautiful sunset. Dinner was made with local produce. People were nice and it was a comfortable place! Prof. Jinnai said one of the most important elements of tourism is "hospitality." But what is hospitality? I felt that means to provide a cozy atmosphere that both visitors and locals can enjoy at their own pace.

「津波と放射能＝3.11」は、私たちの国のあり方を考える分節点となりました。緑豊かな列島なのに、夜はそのシルエットがひときわ明るく電飾で際立つ、超電力浪費国家だったのです。西欧を斜め横に見て一世紀半、それまでの文化をかなぐり捨てることが文明国家への近道と突っ走ってきた私達ですが、今や日本食は世界の中でも洗練された食文化として尊敬されており、扇子や団扇は新しいデザインで、若者にも丸の内にも普及してきました。最近、ゆかたの着こなしが上手な若者を多く見かけませんか。高温多湿な気候風土の日本は、独自の文明を再発見しているところです。

今号では、棟梁や親方や鳶が培ってきた職人技術を絶やしては「もったいない」を実践すること。様式美に伴う銘木や、自然素材の生かし方、臨機応変な納まりと活用など、空間造形に応用されてきた「ワザ」に魅了されること。水と石と植栽と花鳥風月を生かし、四季を通じて「庭」を慈しむこと。など素敵な日本を見直し、私たちの進むべき「ちょうどいい」道を探る手がかりにしたいと思います。

中野 晶子

Memories for Tomorrow 明日へつなぐ記憶 - 伝技塾について -

USUI Haruko
薄井 温子

約 20 年前伝統技法研究会は発足した。当時、古い建物は次々と壊され、気がつくとも見知らぬ街になっていた。せめて取壊される建物の記録をとろうと集まったのが始まりだった。1998 年、研究会を協同組合として、建物の調査、保存、再生設計の仕事を行っている。

8 年前より「伝技塾」と称し毎年講座を開いている。私たちが関わった仕事の中で、もっと知りたい技法について職人や専門の方を招き、話を伺い本にまとめている。第1回目の「日本のステンドグラス」は、旧川上貞奴邸（名古屋市）の復元設計が開講のきっかけだった。戦前、日本では多くのステンドグラス工房が競って建物を飾っていたようだ。輸入の色ガラスを用い、欧米に渡り技術を習得してきた日本人が制作していた。その一人小川三知は東京美術学校で絵を学び、渡米し帰国後東京に工房を開いた。今も川越市の旧山崎邸などに作品が残り、日本画を思わせる繊細な鉛の線で私たちを魅了する。

2 回目「小谷田瓦」は所沢や川越で見られる地瓦の話で、割れや凍てに強い良質の瓦が、かつて入間市で焼かれていた。現在も埼玉県小川町で鬼瓦を制作している鬼板師にも話を伺った。

3 回目「畳」は文京区旧安田邸で発見された約 90 年前の手縫いの畳床から話が始まる。手織りの備後表の最高級品で長年取替えられ大事に使われていた。当時のものは麻糸で縫われ、万一傷み捨てられても全て自然材料なので土に還る。講座会場では職人 2 人がかりで手縫い床製作を実演してくれた。

4 回目「和洋漆喰物語」では日本の左官が、明治時代、漆喰と鏝で本来石膏である洋館の天井レリーフをつくっていた話がある。今も上野の国際子供図書館の天井装飾は漆喰で修理され、かえって石膏よりも柔らかく見える。同本には川越の土蔵の黒漆喰についても収録されている。まだ編集は 4 年分滞っている。6 回目「タイル」では世田谷区より岡崎市に復元移築された本多邸の話が出てくるが、これらの技法の話を記録に残そうと考えている。人間や自然の力を活用していたかつての技法に、これからのヒントを得られるのではないかと思う。

昔から島国の日本は海外から新しい技術が渡来し、職人などが風土の中で工夫を重ね伝統を継承してきた。今度の東日本大震災では多くの建物が壊されてしまったが、優れた所は復元し、改良すべき点は直し、記憶につなぐ家やまちづくりを願う。

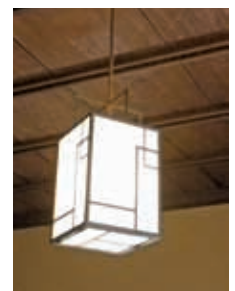


小川三知のステンドグラス（未公開）。障子のような建具に木蓮などの花に切られた色ガラスが配され、透明なガラス越しに庭が見える。写真：田辺千代氏（日本のステンドグラス史研究家）

Dentogihō Kenkyūkai (Cooperative Organization for the Study of Traditional Building Techniques) was established 20 years ago. At the time, many old buildings were being demolished, and the city I once knew was becoming an unfamiliar place. We started by a collective will to keep a record, at least, of the buildings that were being torn down.

We have been hosting annual lectures for 8 years, called “Dengi Juku” (Traditional Techniques Class), in which we invite professionals to talk about subjects that interest us and allow us to cultivate further understanding. In the past, we have held lectures on Japanese stained glass, Koyata roof tiles, tatami and Japanese plaster, and have compiled the information and knowledge we gained into a book. Although the book still requires some editing, it is critical that we make the effort to record these techniques for future generations. Japan, being an insular country, has absorbed new techniques from abroad into its culture to preserve its traditions.

Japan is experiencing unprecedented suffering from the nuclear disaster and radiation in the aftermath of the Tohoku Earthquake. House designs have become too reliant on electricity, but we must reconsider such ways and increase efficiency by adopting the power of humanity and nature, which once played a major role in our lives.



旧本多邸（岡崎市）12年ぶりに復元された。右写真はこの建物の和室にある照明

It was a serious turning point for us all to experience “Tsunami + Radioactivity = 3/11.” Japan’s “green” archipelago suddenly appeared to be a super electricity waster. Japan had concentrated on becoming a Western-style civilized country, eliminating our own culture for years. But now, sushi and other Japanese foods have helped make us one of the most sophisticated cultures in world. Newly designed round and folding fans have really caught on with young people, and even in the Marunouchi area. We often find strolling couples wearing yukata (summer kimono). We are rediscovering our own lifestyle in this warm, humid climate.

This edition focuses on “mottainai,” the regret we feel over wasting certain intrinsic assets. We are thus celebrating such traditional craftspeople as carpenters and steeplejacks, building in traditional but flexible ways utilizing technical skills, choice wood and other natural materials, and our original style of gardening, which effectively and harmoniously combined the beauties of nature, stone, water and plants. This is the time to look at our culture again to find the “chodoii” way move forward. (Chodoii = good enough, well-balanced, nicely designed.)

NAKANO Akiko

Huntington Garden Japanese House ハンテントン庭園ジャパニーズハウス

TANAKA Atsuko
田中 厚子

ロサンゼルス近郊にあるハンテントン図書館・美術館・庭園は、アメリカの大富豪ハンテントン家によって1919年に設立された。その広大な庭園のなかでも特に人気があるのが日本庭園で、そこにジャパニーズハウスとよばれる日本建築が建っている。これは、20世紀初頭のアメリカにおける日本庭園ブームに乗じて、隣のパサディナ市に建てられた日本建築を1912年に現地に移築したもので、ちょうど100周年にあたる今年、老朽化した屋根や壁面の修復が行われた。さらにパサディナのお寺にあった茶室「清風庵」が新たに移築され、小さな滝や小川なども造園された。

ジャパニーズハウスは不思議な日本建築だ。玄関には寺社のように立派な唐破風がついているし、2階のベランダ(?)の手摺は日本建築の意匠ではない。間取りとしては1階に座敷二間と四畳半、2階に板の間二間があるだけの「見せるための日本建築」だ。数年前、この建物を含めてアメリカに残るジャポニズムの建築を調査した。そのとき、カリフォルニアの美術商が関わったこと、移民の日本人大工が移築を手がけたことなどがわかったが、建物自体の来歴はまだ不明ことが多い。

ジャパニーズハウスの修復を担当した建築家のケリー・マクロードさんは、この建物の歴史性を重視し、できるだけ当初の形に復元しようと試みた。ケリーさんによれば、屋根の修復に日本の柿葺の見積りをとって見たところ、予算内におさまらず、元々葺いてあったアメリカの伝統的なシングル材で葺き替えた。唐破風の曲面は少し雑に見えるけれど、カリフォルニアの日本建築はそれで良いと思う。建物から飛び出した雨戸の棧や、屋根の上のシーサー(?)も、現地での工夫が微笑ましい。

一方、今回移築された清風庵は、1960年代に京都の中村外二工務店によって建てられた茶室で、同工務店の中村義明氏が京都で修復してから現地に移した。父子二代の手による茶室は、日本の職人さんたちによって現地で仕上げられた正統派の日本建築だ。規模・用途の異なる二つの日本建築は、それぞれの時代の日本建築ブームを反映している。



ジャパニーズハウス東立面

ジャポニズムの時代からずっと、日本庭園・建築は自然とともにある住まいの理想のかたちだった。環境との共生が重視される今日、新たなブームが起こることを期待したい。

The Huntington Library, Art Collections and Botanical Gardens in San Marino, California are known for having one of the finest research libraries in America. Among several gardens, there is a popular Japanese Garden where the Japanese House has been situated since 1912. After a year of renovation, the garden and house reopened this spring, marking the facility’s centennial. At the same time, a teahouse called Seifu-an, built in the 1960s, was donated to the garden by the Pasadena Buddhist Temple.

The Japanese House has unique features, including the Karahafu roof of the entrance and the handrail on the upper level. The floor plan is also not typical of Japanese domestic architecture, making the house seem more like a showroom. Although its historical background is mysterious, it is clear that it was built through the collaboration of Japanese and Americans and cared for by Americans for a century.

Architect Kelly Sutherlin McLeod devoted herself to restoring the house with historic accuracy. Local shingle wood was used again to restore the roof and the walls have gone back to their original dark color. The teahouse made a return trip to Kyoto for restoration by Yoshiaki Nakamura, whose father built the original structure. It was carefully reassembled at the site by Japanese craftsmen.

Both structures represent the Japanese fever of the times. Japanese garden sand houses have been respected as an ideal blending of nature and house. Thanks to The Huntington and their professional restorers, we hope the Japanese Garden can be a trigger for another Japanese boom.



ジャパニーズハウス南立面

The Japanese Garden as Expression of Nature
日本庭園文化の読解—自然の骨格と仕組みに学ぶ

MIFUNE Kyori
御船 杏里



東山へと続くゆるやかな上り面、全面に光を受け明るい

大地は、水を抱きかかえ、光を受け留める。人は、自然との結びつきを求めて、水と光を受け留める仕組みを探し、造り上げてきた。その仕組みは、時代を超えて「自然感と美意識」の結晶となり、日本庭園に息づいている。そこに身をおくと、自然の気配を感じ、自然との強い結びつきを実感し、人の気持ちが開かれていく。

京都の東山裾野にある無隣庵庭園（約 3000 m²）は、琵琶湖より運ばれた疏水の水を、途切れることなく取り込み、多様な水の景をつくりあげ、日本庭園における自然との一体化をさらに繊細で多彩なものに変幻させた。水の流れる土地が、庭園に選ばれてきたのは、水ほど自然の輪廻を視覚化し、体験させる姿はないからであろう。無隣庵は、1896年に、「骨格」が成立し、100年以上経過した今も「仕組み」を持続し、現在も庭園として生き続けている。七代目小川治兵衛（植治）（1860-1933）の代表的な作品である。

書院より、奥へと庭が続き、樹林とのスカイライン沿いの上空には東山を望む。暗がりの中で、樹林に落ちる一筋の光に、滝は輝く。はるか東山より流れ着いたかのような水、三段の滝から瀬落ちを過ぎて、深く急速だった流れも、幅を増し、底が見えるほど浅く、ゆったりとした流れとなり、小鳥も歩けるほどだ。書院前に辿り着くころには、小さな段差のせせらぎとなり、さらに石橋の下をくぐり、流れ出てゆく。川底に埋め込まれた小石群によりしぶく水は、はっきりとした姿として刻まれる。小石群は、大地に根を下ろし、大地との関係を強めつつも、皆こちらを向いて周囲の生き物たちの存在を忘れていない。「浅き水による雄大な景」の秘密は、このあたりにあるのだ。自然の特徴を的確にとらえ、庭に反映することで、心に残る情景を生み出す。

天空光と水の流れを映し出すための舞台装置としての庭。琵琶湖疏水は、面のつくり方、流れの幅・勾配・流量調整などの工夫で、上流から下流へ至るイメージや、海の水がまた山へ還るイメージなど、多彩な相を創出した。動きや水音、遠近感を生み出し、東山と庭との関係にも、新しい風を吹き込んだ。大自然のどこにでもある日常的な野山のイメージを庭に取り込むことで、自然の骨格と仕組みに学ぶという原点へ立ち返った。

〔東山 裾野に寄り添うもみじ葉は 疏水の水を 錦にくくる〕



水面に姿が映りこみカエデの枝葉でうめつくされる

The water falls and the light flows on the ground. We hope to commune with Nature. I always experience Nature's embrace in Japanese gardens. In gardens I can feel Nature's aesthetic sense.

Murin-an, a Japanese villa with a garden located near Nanzenji Temple in eastern Kyoto, was built during the years 1894-1896. To date, it has survived for over 100 years. The area is about 3,000 m². The garden was designed by YAMAGATA Aritomo and executed by OGAWA Jihei VII (Uejii; 1860-1933), the pioneer of modern gardens in Japan. Murin-an takes in the waters of Lake Biwa (670,000 m²) and lets it out. The water flows continuously and is rich. Land where water flows is chosen for gardens. The garden collects water and visualizes the circulation of Nature. At Murin-an, Higashiyama (Mt. Higashi) can be seen in the distance from the drawing room. The waterfall is visible along with the water of Higashiyama. On a gentle slope, borrowing the hills of Higashiyama as its backdrop, this stroll garden draws water by way of the Biwako Sosui canal and beautifully incorporates a three-tiered waterfall, a pond and a luxuriant lawn.

The waterfall is narrow; the pond is wide. The water changes form freely. As a shallow stream, a little bird can also walk along it. The width, the slope and modulating flow of water are incorporated into the garden, making it appear that it flows into the lower stream from the upper stream. It also creates an image from which marine water returns to a mountain again. The garden has perfectly captured Nature's features. The sight of the garden remains in the heart. A garden is a stage expressing Nature.

The familiar images of Nature have been reproduced in the garden. It went back to the starting point, creating the framework and structure of Nature.



カエデの葉と葉の間より〔流れ込む水〕

The maple leaves nestle at the foot of Higashiyama, dyeing the water colorfully.

定年退職を前に、彼女は考えた。この家で如何に豊かに過ごして行くか。30余年前急遽建てることになったこの住宅、日々の生活を支えて来たが、義母を見送った今、1階が活かされていない。

アートや綺麗なものが好きな彼女はここを画廊に、と夢を託した。若いアーティストへの発表の場を提供し、集まる人々が出会い、語り合う場を作る。今までの仕事とは無縁だが、家族の賛同も得た。

旧友の建築士に連絡。1階を画廊に、その他の生活空間も快適に、と思いを伝える。建築士(筆者)も計画に大いに共感。駐車場を移動し、前庭をウッドデッキとし、広めの入口に。その中に季節の彩りを添える1本の樹。木陰のベンチに会話が弾み、つながる画廊へ導かれる。路地空間まで流れるアートスペースを創ろう。2階は暮らしやすい室配置とし、そしてウッドデッキの樹の揺らぎが窓先感じられるように計画。

ここは目黒の権之助坂の一筋奥にある一見、無愛想な種々の建物に挟まれている都市の路地だが、住民の繋がりや暖かさ、この画廊誕生で顕在化する期待している。愛車の屋内車庫にしたかった夫が譲ったスペースのリノベーションだ。これから、多くのアーティスト達と共に大きく育てたい。

その小さな画廊の名前は、『ギャラリーA2』である。
<http://gallerya2.s1.bindsite.jp/pg27.html>

In preparation for life after retirement, Akiko decided to open a small gallery on the first floor of her house, which was built 30 years ago. She loved arts and crafts and hoped the gallery would be useful for young artists to present work, meet and talk. Akiko's husband gave up on his dream to have a garage and instead supported her idea.

She asked me to renovate the house, since I am an architect and old friend. I was also enthusiastic about her plan. The front yard became a wood deck with a beautiful tree for all seasons and two benches. The art space in the gallery could expand to the deck. The living room on the second floor was designed in comfort for the family to feel the tree's presence outside the window. In



筆者のデザインした、七変化できる展示台も待機している。

concert with the simple buildings and alleys in Meguro, the area is sure to become a good community inspired by the small gallery named Gallery A2.
 (trans.=TA)

Report from the Disaster (4): Lack of Progress in Tohoku
 被災地通信(4): 進まない復興事業

IWAI Hiroko
 岩井紘子

現在進行形の復興の現実を報告します。2000戸にも及ぶ神社仏閣、伝統的建造物が流失とか半全壊の被災を被っており、国として専門家ベースで調査、復興施策支援者所謂ヘリテージマネージャーを募っている事。一向に進まない被災者定住施策。方や被災各地での区画整理事業の住民説明では、高台移転住宅は35.6坪程度、土地代金込で最低2千万円は掛るというのに坪2万円何がし程度の買い上げ額提示、公営住宅に至っては1住戸面積が30㎡余の計画。

仮設住宅という異常な生活空間に麻痺され、本来の生活感がないがしろにされていることに声を上げない被災の民。これを復興と云うのでしょうか。復興仮設商店街での元気印のノボリを見るのは辛く、荒れ果てた土地の雑草除去ボランティアが生まれています。書いているうち怒りを覚えて来る、それが現状なのです。

I would like to make a brief report about the ongoing revitalization of Tohoku. More than 2,000 shrines, temples and traditional buildings were partially destroyed or washed away, and the national government has been recruiting professional researchers, reconstruction and heritage managers for this situation. But the housing policies for disaster victims do not show any signs of progress. At a meeting to explain a highland relocation project to the victims, they heard that small houses of only about 118.7 m² are being prepared, with each square meter costing 20,000 yen. That means an investment of over 20 million yen. Quarters in community houses are less than 30 m².



移転先の決まらない仙台市若林区荒井地区の現状

Even though the victims had to endure miserable lives in temporary shelters, they never raised their voices about housing, and their needs have been ignored. Is this really a process of "revitalization" for Tohoku?

It is so painful to see "Cheer Up, Tohoku!" signs in the temporary shopping areas, as many volunteers work to remove weeds from the deserted areas nearby. This is the ongoing situation, one which makes me feel angry even as I write this essay.
 (trans.=KU)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2012年9月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

URL :http://uifa-japon.com

“The Pioneering Women in Architecture” and “Proceeding with Architecture” Show 「パイオニア展」と「建築と歩む展」

あざみ野に続き、千代田区男女共同参画センターでの「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展」が6月22日から29日まで開催されました。区役所1階の開放的なスペースと、それにふさわしい展示デザイン(UIFA JAPONの森田美紀さんによる)の力もあって、女性459名、男性372名の入場がありました。

続いて、埼玉県の武蔵嵐山にある国立女性教育会館女性アーカイブセンター展示室において開催中の「建築と歩むーチャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」(8月7日から12月9日まで)は、同会館主催、UIFA JAPONパイオニア展企画委員会その他が共催する展覧会です。「パイオニア展」日本編のパネルがそのまま展示されるとともに、新たに、現代の日本の女性建築家3人の活動が加えられた内容になっています。

このあと「パイオニア展」は、江の島にある神奈川県女性センターでの展示も準備中で、さらに、モンゴルでの世界大会など、まだまだ回を重ねて行きそうです。(在塚子)

Let's get together in Mongolia! Warming up Version vol.1 さあ行こう「モンゴルで集結！」 特別企画第一弾

2013年9月1日～7日にモンゴルで開催の世界大会に向けウォーミングアップ企画です。過去の大会の楽しい様子から、今後への期待につなげます。

Reminiscence of Seattle

思い出のシアトルコングレス FUNAZU Takako 船津貴子

第5回UIFAコングレスが1979年9月30日から10月4日迄アメリカ・シアトル市で開催されました。私は今は亡き飯島静江さんと二人でその大会に参加しました。シアトル市はロッキードに関わる航空機工場のある所という知識のみで行った都市でしたが、水と緑に囲まれたしっとりとした景観と、まだその頃の日本では少なかった超高層建築が市の中心部に聳えた姿にすっかり魅了されました。会議は街なかにあるオリンピックホテルが会場で、UIFAの本部もそこに設けられ、出席者の多くも宿泊していたので、会議の運営にも大変便利でした。但しパネルの展示はホテル内ではなく銀行のホールの様な所で、全員で見学に行く時間がぐみ込まれていました。

この時の会議のテーマは「変化する原材料に基づく新しい概念」でした。飯島さんが日本の建築基準法による設計の実例を挙げての説明の中で、日陰規制にふれた時は会場に「ホーッ」といっせいに声があがりました。またキャドによる製図を「インディアン絵みたい」と酷評した人もあり、現在と較べて今昔の感しきりです。

コングレスの途中には全員船で島へ渡り野趣溢れる鮭の丸焼きの

■ 役員会報告

第2回5月14日 2012年度総会準備、郡山視察、千代田区パイオニア展準備、岩泉だれでもフォトグラフィア協議、法末オープンガーデン準備、NL92号企画報告、第59回海外交流の会進捗報告

第3回6月16日 2012年度総会開催、新役員体制スタート、総会後基調講演開催

第4回7月18日 総会・基調講演報告、パイオニア展報告、岩泉支援復興記録集準備、第56回海外交流の会協議、NL92号(英文併記)進捗報告、NWEC(埼玉)主催「建築と歩む」へ資料提供、世界大会「2013年9月モンゴル」決定

第5回8月27日 第56回海外交流の会準備、郡山どこでもカフェ報告・次回予告、このゆびとまれ見学会準備、NL92号進捗報告、モンゴルへ海外交流の会準備

Member's Recommendation: "Picture Book of Tsunami"

■ 会員紹介の本 「つなみのえほん」

WATANABE Kiyomi 渡邊喜代美

この「えほん」は「かみしばい」でした。南三陸訪問3ヶ月目ぐらいに工藤真弓さんと「かみしばい」にであった。感激と感動がごちゃ混ぜになって、多くの方に見ていただくには映像化か出版だとの思いが募って、まず出版をうながし支援した。真弓さんの豊かな心がこの本を創った。あの日の出来事が静かに、多くの人に伝わる言葉で語られている。

真弓さんは神職にあり、山上八幡宮の25代目、ひとり息子のゆうすけ君5歳が「おかあさんゆうすけにはこわれたふるさとがあるんだよーしづがわ」という一言が、心をふるわせ、ふるさとの豊かさと悲しみを生きる力をくれた。今、真弓さんは「志津川まちづくり協議会」のメンバーともなって、自分たちの町を自分たちで創るために力を発揮している。



市井社 1,200円

お昼をいただいたり、一日ハイキングでセント・ヘレンズ山へ行ったりもしました。この山が後日噴火したのは驚きました。華やかな閉会パーティーの翌日、ポストコングレスツアーに参加する人達は飛行機でポートランドへ飛び、ここで会員の家を見せていただいたりした後、全員が一台のバスに乗って西海岸ツアーへ出発しました。風光明媚な西海岸を走るバス旅行でしたが、昨日も今日も同じ景色に飽きた頃、誰かが歌を口ずさみますとなんと！皆で歌えるのです。銘々が自国語で歌う菩提樹、野薔薇、シューベルトの子守唄等々の調べを乗せてバスはひた走りました。

途中何泊かして、サンフランシスコに到着、名物の急坂を上り下りするケーブルカーは修理中とのことで乗れませんでした。ゴールデンゲート・ブリッジはしっかり見えてきました。

ツアーの終点ロサンゼルスでは全員でハリウッドを見物し、建物が火事になる様子や河に落ちる等の実演に驚きの連続で楽しみました。ビバリーヒルズにもバスで行きエリザベス・テイラーの家や数々の豪邸のたたずまいを外から見物したりしました。ロサンゼルスではホテルに二泊して解散となり、皆それぞれの便で帰国しましたが、この旅行中全員すっかり打ちちけて親しくなりました。私は特にベルギーの人達と仲良くなり、その交流は30年たった今でも続いています。一台のバスに何カ国の人に乗ったのでしょうか、本当に心暖まるツアーだったとしみじみ思い返します。唯この時の様々なことを語りあえる飯島さんがもうおいでにならない・・・と万感の想いをかみしめています。

■ 編集後記

東北、越後、京都からベネチアまで、熱い風吹きわたる8頁です(在塚)。夏の疲れの厳しさに休むほかない心身の無力(黒石)。西欧行きはこの文化が毛穴が開くこの湿度なしでは解け得ないと確認するためか(井出)。19兆円!でもなぜか被災地の本当に必要どころに回ってこない不思議(渡邊)。After 18 months, it's clear that Tohoku is benefiting from UIFA's activities. Keep up the good work! (Karen)。ゼンマイのほどける音や秋の蝸(須永)。今夏の暑さは厳しかった!! 気合だけで立ってた感じです。ん? ことは意外に根性あったのかも?(飯田)。国立競技場の改修費まで復興予算だったとは。必要な人には届かない(田中)。ほんとうに暑い夏でした(薄井)。ほっ! とじゃばら=田舎への羨望=グリーン・ツーリズム=法末、妻有(編集長:中野)

translation=NA(中野)、TA(田中)、KU(黒石)